

デール・エル・カラ―遺跡の史跡公園化計画について

―レバノンにおける観光開発と遺跡保存―

辻村 純代

The Tourist Development Project of Deir El-Qalaa in Lebanon

Sumiyo TSUJIMURA

In 2003, the Lebanese Ministry of Culture planned to open the Roman city site of Deir El-Qalaa, to the public as an historic park taking the opportunity of the withdrawal of Syrian troops that had occupied it since 1993. This project was started by a consultant team directed by Dr. Y. Makaroun Bou-Assaf that made an inventory of the actual situation. Takura Izumi and Sumiyo Tsujimura were dispatched by JICA at the request of the Ministry of Culture to assess the results of the inventory and the pilot plan for preservation.

Located on a hill 10km east of Beirut, the site was divided into three parts by the consultant team, Area I (The Baal Marcod Temple), Area II (Sacred Area including the Juno Temple with a memorial gate), and Area III (Residential area including a public bath, a Basilica and Nymphaeum). Because the Baal Marcod Temple, which is the third largest in scale in Lebanon, is enclosed in the Maronite convent that was established in the middle of the eighteenth century AD, the consulting team was not able to make an inventory there.

Area II and III were surveyed and a detailed map on a scale of 1 to 100 was made. A long stone wall was built during this project on the south side of Area II and tourists may look down at the ruins from there, but not enter. Therefore the largest locale, Area III, where tourists are free to walk around is the main subject of the project.

Beside two main streets paved with flat stones of various shapes, dwellings, shops, a Roman bath, and a Basilica with a mosaic floor are all situated near the junction of the two main streets. Some facilities for storing water including the Nymphaeum and facilities for making olives oil also remain in this district. However, the ruins were greatly damaged due to three primary causes: 1) exposure to the open for a long term; 2) inaccuracy in the restoration by H. Kalayan in the 1960's; and, 3) the erection of new buildings housing a Syrian army camp. Thus, since the site cannot be restored to its original condition the principle of the project should be maintained after removal of the modern construction work. According to this principle, we made some proposals for avoiding further damage by keeping public access to a minimum.

In Lebanon, tourist development of archaeological sites will advance rapidly in the near future as a leading means for economic reconstruction. To protect archaeological sites from the destruction that tourist development brings, the strengthening of the Directorate General of Antiquities, that has jurisdiction over archaeological sites and activities, is strongly encouraged.

はじめに

2005年2月、内戦終結後のレバノンにおける経済復興の中心的存在であったハリリ元首相がテロの犠牲になって以来、ベイルートでは数十万人とも言われる大規模な民衆デモが続いたことは日本でも大きく伝えられた。デモは間もなくカラミ内閣を退陣に追いつめ、内戦後も国内に駐留を続ける1万4千人にのぼるシリア軍の撤退へと要求をエスカレートさせた。この動きに対して、再び内戦に陥るのではないかという恐れを抱いたのは親シリア派のレバノン人だけではなく、勢いにのる反シリア派もまた、その恐

れを強く抱いたことが幸いしたようで、今回は抑制されたレバノン人の行動とシリアの素早い対応と、さらには国際社会の監視の下に、シリア軍の撤退問題は意外なほどに順調に解決されつつある¹⁾。ただ民衆デモが一段落したあともベイルート市内、及び近郊では小規模なテロ事件が頻発しており、現在も人々が緊張と不安を強いられているのも確かである。そのような中、遺跡保存計画の検討を目的に国際協力機構（JICA）から派遣された泉拓良氏と私は、観光客の姿がほとんど見られない、閑散としたベイルート空港に降り立った²⁾。

今回、遺跡保存と史跡公園化の対象となっているのは、バイルートの東方丘陵地に位置するデール・エル・カラー遺跡 (Deir El-Qalaa) (別称ベイト・メリー (Beit-Mery)) で、レバノン考古庁の依頼を受けた日本西アジア考古学会から松本健氏と筆者が国際交流基金の専門家として派遣された当初 (1998～1999年) から発掘調査対象の候補に挙っていた、馴染みのあるローマ時代の都市遺跡である。私たちは結局、高速道路建設で破壊の危機にあった南部レバノンのラマリ遺跡を選び、学会員諸氏と共に周辺部の分布調査を実施した。結果、予定ルートの変更というレバノン政府の決定がなされてこの遺跡を守ることができ、その後、同遺跡は泉氏を代表とする発掘調査団に引き継がれて、日本隊の拠点となった経緯がある³⁾。

そのような次第で、デール・エル・カラー遺跡についてはその後、日本隊としては関与してこなかったのだが、長期に亘って遺跡を占拠していたシリア軍の退去を契機に、レバノン文化省が2003年に史跡公園化のプロジェクトを立ち上げ、その評価と助言を日本に要請してきたことから、今回の派遣となった。要請は、計画案についての技術的なアドバイスを受けたいというのがその内容であり、従ってプロジェクト自体への筆者らの参画を意図したものではないを予めことわっておきたい。

遺跡の概要とプロジェクトの目的

遺跡は東方丘陵地帯に点在するマロン派修道院の一つが所有する敷地内にある。市内中心部から10km、海拔750mの丘陵の先端に建つ修道院は18世紀中葉に創設され、そのなかに取り込まれたローマ神殿の外見は、プロナオスを形成する円柱列の一部と巨石を配した北側外郭にすぎないが、長さ33.17m、幅17.36mと推定されるその規模は、レバノン国内ではバアルベック、ニーハの神殿に次ぐ第3の大きさを誇っている (図1)。バアルベック神殿に



図1 バアル・マルコッド神殿と修道院 (Area II)

祀られたジュピター・ヘリオポリタンと同じ、雷神であるバアル・マルコッドを祀り、神殿はバイルート市内を見下ろすように西に向かって建てられている (AREA I)⁴⁾。ここから北には一段下がってユノー神殿が建てられ (AREA II)、その東側のなだらかな傾斜地 (AREA III) にはローマ時代からビザンチン時代にかけての住居群やオリーブの搾油施設、公共浴場、モザイクの床をもつバシリカ、ニンフェウム、列柱道路などの遺構が残っていて、神殿域を含めると約2万m²の広がりを持っている。

神殿の存在は18世紀には旅行者達にも知られていたが、神殿に残された碑文を中心に遺跡に関する報告がなされたのは20世紀になってからのことである。60年代には当時、考古庁長官であったH.カラヤン (Kalayan) によって神殿や居住区域での大規模な復元が実施されたのだが、これに先立つ発掘調査は行われず、復元後の図面しか残っていない。カラヤンはレバノン国内にある多くの遺跡の復元を手がけたが、遊離した石材を加工してコンクリートで固めたり、元の壁の一部が残っているにもかかわらず、すべてを新たに作ったりとその方法は極めて乱暴であった。ニーハやマジェト・アンジャルの神殿もそうだが、デール・エル・カラー遺跡を紹介した書籍や論文に掲載されているユノー神殿や列柱道路の写真はこの時に修復されたものである⁵⁾。加えて遺跡の理解を困難にしているのは、内戦中の遺構破壊とバアル・マルコッド神の浮彫りを有する奉献台など重要遺物の盗難で、内戦後はシリア軍がここに駐留し、遺跡内の石材を積んで新たに生活施設を作るなどして (図2)、遺跡に一層の荒廃をもたらした。

このように、遺跡は長期に亘って露出していた上に人為的な破壊が加わったため、現在はカラヤンによって復元された列柱道路も残っていないし、別荘のモザイク床も修復に使われたコンクリートごと剥がされて放置されている。そして、復元しようにも、信頼できる発掘調査の成果が残



図2 シリアン・ハウス (Area III)

っていない。また、史跡公園化に先立つ遺跡の範囲確認調査は実施されておらず、例えば AREA III では北方の周辺区域に未だ遺構が残っている可能性があるにもかかわらず、今回の保存対象区域外となっている。考古庁が修道院から買い上げた土地も遺跡内のごく一部ののだが、それ以外の土地でも勝手に建物を作ったりすることは法的に禁じられているということだから、当面はこれ以上の人為的な破壊だけは避けられるようである。それにしても、このように条件が十分には整っていない段階で公園化を急ぐ背景には、マロン派有力者達の政治的思惑だけでなく、観光資源として遺跡を活用したいレバノンの逼迫した経済状況もあるのだろう。

近年の遺跡整備事業としてはフェニキア都市として知られるピブロス遺跡、青銅器時代からの重要な碑文が点在するドグリバー遺跡が挙げられる。この2つの遺跡の重要性に比べると、デール・エル・カラー遺跡の歴史的評価は高くないものの、ローマ時代の著名な都市遺跡が海岸部に

集中し、丘陵地の遺跡は神殿を除くとその実態がほとんど知られていない現状において、この遺跡がもつコンパクトな都市的景観は、前述したような問題点があるにしてもなお、保存されるべき考古学的価値があるように思うのである。

保存方法 (図3)

Area I : バアル・マルコッド神殿が今回の史跡公園化計画ではほとんどその対象となっていない理由は、先に述べたように土地の所有者である修道院との関係によると言ってもよい。現在も修道院の増築工事が行われ、神殿の存在は増々希薄な印象しか与えなくなりつつあるにもかかわらず、史跡を整備して観光化を推進しようとしている政府の後ろ盾となっているのもまた修道院であるという矛盾した構造がある。そして、その結果として、都市の最も重要な建造物としての神殿を等閑視した計画とならざるを得なくなったのだろう。

Area II : ユノー神殿を含む聖域区については、南側に

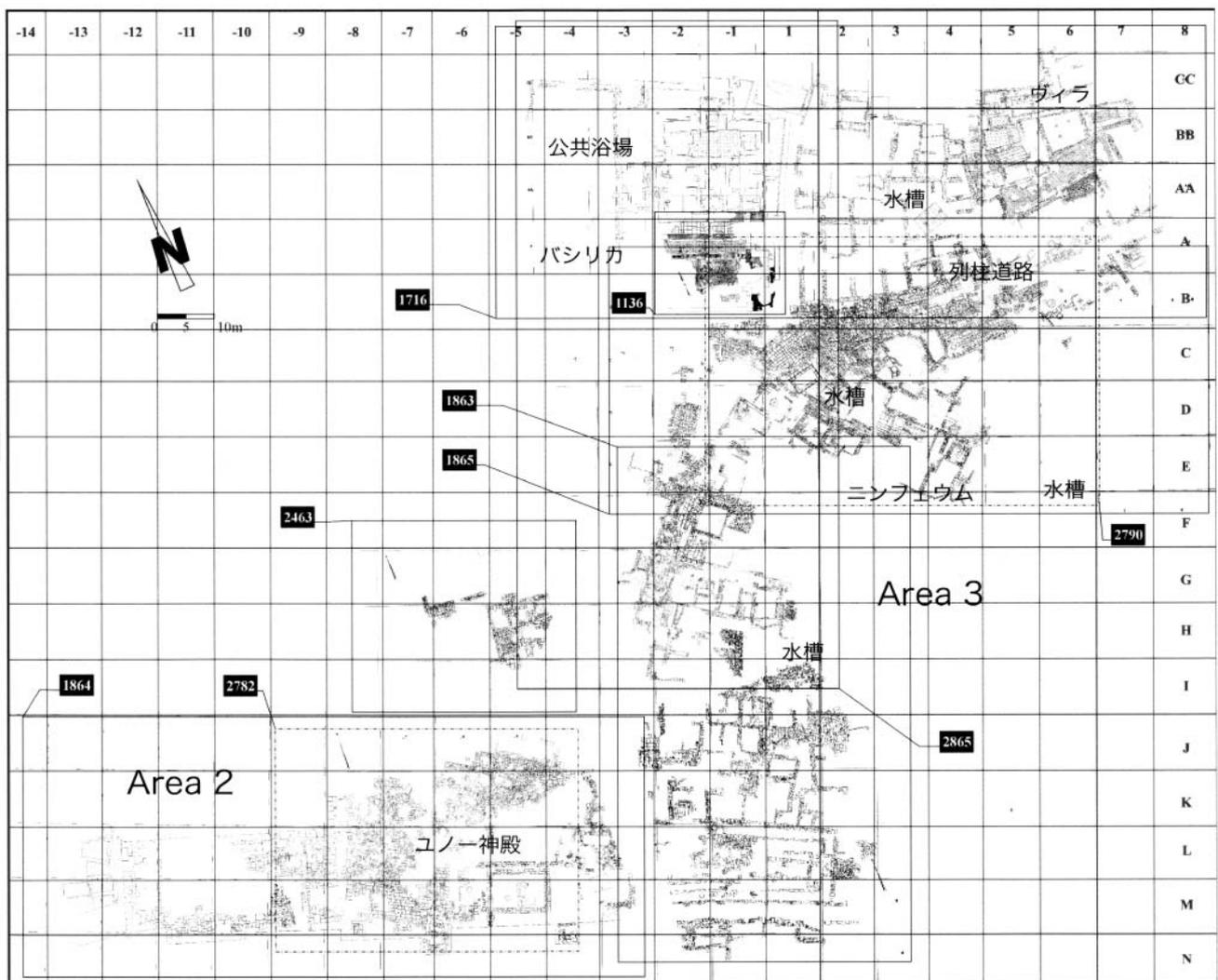


図3 遺跡全体図 (Area II・III)

長く伸びる石垣が新たに築かれており、この石垣とバル・マルコッド神殿との間を駐車場として利用するらしい。そして、見学は石垣からにとどめて観光客の地区内への立ち入りを禁じている。ただ、そうすると北を向いたユノー神殿に付属する記念門を背後からみることになるため、正面に刻まれたトラヤヌス帝とユノー女神に捧げられたラテン語銘文⁶⁾を目にすることはできない(図4)。それだけでなく、記念門の南方にも遺構は続き、さらに記念門の西方にも、南に上っていく大規模な階段が設置されているにもかかわらず、この石垣によって断ち切られてしまっているという難点がある。

カラヤンによるユノー神殿の復元については多くの問題点がこれまでも指摘されているが、ここでも建築学的、あるいは考古学的な調査は実施されてはならず、神殿の周囲に残っている遺構についても同様に未解決のままになっている。

Area III: Area IIとは舗装道路によって分離されてい

るが、ローマ時代の主要道路は2つの地区をつないでいたと推定されるので、ローマ都市内部の地区割りとそのまま重なるわけではないが、住居、商店、オリーブ油などの生産施設が密集するこの地区は生活空間とみて問題はなく、3地区のうちで最も広く、保存計画の主たる対象となっている。

ローマ都市にしばしばみられるような方形区画はみられず、不定形の石を敷いた幅4~5mの道路が南から北に向かって緩やかに下降しながら伸びて、ほぼ同幅の東西道路と交わるのだが、直交してはおらず、また、これより北に伸びる道路はないから三叉路となっている。この2つの道路が主要道路なのだが、南北道路の両脇に並ぶ商店や住居、特に道路に面した入り口付近の構造は複雑で、道路幅が一定でない。おそらく家屋の改変と路面敷石の補修の結果であろうが、路面の状況をわかり難くしているもう一つの原因は、ご丁寧にも1本ごとに石垣で囲んで保護された樹木の存在である(図5)。樹木は住居壁や路面の石敷を



図4 記念門 (Area II)



図5 遺跡内の樹木 (Area III)



図6 樹木による破壊 (Area III)



図7 公共浴場の北方壁 (Area III)

破壊する原因ともなっている（図6）ののだが、レバノンの法律によれば遺跡内の樹木を取り除くことは禁じられており、止むを得ない場合は遺跡内に移植しなければならないということである。

さて、2つの主要道路が交わる三叉路だが、その北側は一段高くなっており、ローマ時代の公共浴場や5世紀後半から6世紀初めと推定されるバシリカ⁷⁾といった公共施設が建てられている。公共浴場の北端に築かれている石垣がArea IIIの北限となっていて、高さ4mの石垣の一部は北からの土圧で大きく傾いている（図7）。その箇所だけが傾いている理由は不明だが、大量の水を使う浴場の近くであることを考えると、下層に滞水の誘因となる遺構が存在する可能性もある。浴場の石壁が苔や塩の付着によって劣化が著しいことから、ここでは単に土圧の問題を解決するだけでなく、排水処置を施す必要がありそうである。

東西道路も南北道路と同様に不整形の石が敷かれており、三叉路より西方は敷石の残りも良いが、東方の道路では敷石が残っているのは三叉路の周辺だけで、東方に進むにつれ見られなくなる。列柱は三叉路より東方、道路の北側に沿って並んでいたのだが、現在ではそれらの列柱は破損して周辺にころがっている。そして、その北方にはモザイク床と小規模な浴場を伴うヴィラがある。モザイク床が残っているのはバシリカとこのヴィラの2カ所で、どちらもカラヤンによってコンクリートで固定されたが、後者はコンクリートごと剥がれてしまっている。

また、道路を挟んで白型破碎機とスクリー型圧搾機の組み合わせからなる数基のオリーブ搾油施設⁸⁾が散在している。三叉路の一角にある方形の貯水槽をはじめ、付近には貯水槽や溝が少なくないこととオリーブ油生産とは関係があるかもしれない。なお、方形貯水槽は石材が多く残っているので、ある程度の復元は可能と思われる。地区南端にあるニンフェウム（図8）は地下貯水槽の上の円筒型水



図8 ニンフェウム（Area III）

槽とそれを囲む矩形の壁が残っているが、小規模で、その周りに彫像が配置されていたか、どうかも不明である⁹⁾。

以上、Area IIIの遺構に関して冗長に過ぎたかもしれない説明を加えたのは、この地区が保存計画の主たる対象というだけでなく、個々の遺構の保存状況が異なっており、従って、それに応じた方法が採られるべきだからである。

提出された計画の基本は現状保全であり、そのための詳細な実測図は既に作成されている。そして、その図のなかにはチケット売り場やトイレの設置場所とともに見学者の導線も想定されているのだが、それを外れて遺構内に立ち入りを規制するものではないから、Area IIIについては自由な見学が許されていると断言している。しかし、本格的な考古学的調査が実施されないまま、その性格さえ判然としない遺構もある現状で観光客の立ち入りを許せば遺構の損傷が進むことは容易に想像できる。道路の石の敷替えも家屋の改変とともに、都市の変遷を知る重要な手がかりとなるのだから、路面も保護した方がいい。そこで、南北道路に関しては路面上に木道を通すことを提案した。それにより、遺構への立ち入りを防ぐ効果も期待できるからである。

遺跡を歴史教育の場と捉えるなら、遺跡内の樹木は無用どころか破壊の要因であるからすべて除去した方がよいのだけれど、国旗にまで樹木を配するほどに樹木に対するレバノン人特有の思い入れは無視すべきではないと思う。それで、遺構を破壊している、あるいは遺構の理解を困難にしている樹木については移植することを勧めるにとどめた。

緊急の保存・修復処置が必要なのは、公衆浴場北方の壁とヴィラのモザイク床である。前者に関するレバノン側の計画によれば、まず壁の背後の土砂を排除し、中にコンクリートの壁を作る。次にコンクリート壁の裏に暗渠を設置して排水し、その上に砂利を詰める。傾いた壁は南方から支えの施設を作るというものであった。つまり、傾いたままでも保存しようというのである。これに対して、石の積み直しをして壁を垂直に戻すという本格的な補修方法もある。しかし、どちらにしても重要なのは、石壁の裏側に遺構がないか、どうかを確認することであり、排水が完全にできるような処置を施すことである。一方、ヴィラのモザイク床については、モザイクの裏をコンクリートで固めたものが破片化しているのだから、できるだけそれらを接合して元の位置に戻して固定するしかない。

この他、シリア軍が遺跡内の石材を使って建ててしまった構造物も除去しなければならないが、この場合も原位置にあった石材と新たに積み上げた石材を見極める必要があり、考古学の専門家が立ち会うべきだろうと思う。ところが、考古庁が抱えている考古学の専門家は各地域に配属さ

れている5人にすぎず、とてもその作業に割けそうもないと暗然たる気持ちになっていたところ、今年度、新たに5人の考古学専門家を含め、考古庁として15人を採用することになったのである。この10年間は採用がなかったのだから、画期的なことと言わねばならない。

観光開発と考古学

バアルベック、ピブロス、ティルス（スール）、アンジヤルの4遺跡が世界文化遺産として登録され、レバノン観光の目玉となっているが、バイルートでもローマ時代の大規模な公衆浴場や列柱道路などが高層建築の林立する市内中心部に保存されている。海洋交易によって富を蓄えたフェニキアでは、海岸部に大都市が築かれたのは当然なのだが、ローマ軍の東方進出に伴って丘陵地にも神殿や小規模な都市が次々と建設された。

フランスとポーランドの合同調査によって、ローマ都市の実態が明らかになったシヒーム遺跡¹⁰⁾のような例もあるが、丘陵地にあるほとんどの遺跡は十分な発掘調査が実施されておらず、もちろん観光対象にもなっていない。このような状況は、中途半端な観光開発をするよりも遺跡の保存という点では却って良いのかもしれない。ところが近年は、丘陵地での宅地化や道路建設が急速に進んでおり、従来からよく知られたデル・エル・カラー遺跡の周辺にさえ宅地化の波は及んでおり、遺跡を観光資源として積極的に開発して保護する方が良い場合もあるのではないだろうか。今回の公園化計画がそれに相当するか、否かの判断は難しいところだが、少なくとも、この計画に伴って遺跡の現状を図化し、緊急な保存処置が必要な部分に関してはそれを施し、また遺跡内での新たな建築など現状の変更を禁止できた点は評価しなければならないと思うのである。

もちろん、発掘調査を経てのちに、史跡公園として公開するのが理想ではあるけれども、公開されたのちにも発掘や考古学調査は不可能ではない。実際、ピブロスやティルスのように観光地として賑わう遺跡でも発掘作業は実施されており、そのような調査・研究を中小の遺跡においても担保できるか否かは、考古庁による適切な遺跡管理にかかっている。

本計画に関しては立ち上げの時点から大統領府の意向が強く働き、形式的には考古庁が管轄しつつも実質的には民間のコンサルタントチームによって進められてきた経緯が

あって、考古庁の消極的な対応が目立つ。しかし、観光開発に力を入れ始めた政府の方針に対して、観光開発と遺跡保存との危うい関係を認識して埋蔵文化財行政の舵取りを行っていくのは考古庁であり、そのためには何よりも考古庁の調査体制が強化されねばならないし、その第一歩として今回、調査員が大幅に増員されることは朗報にちがいない。そして、そうしたレバノン側の努力が実を結ぶよう、人材育成の面で今後も日本が貢献できる場所は大きいだろうと思われる。また、遺跡の観光化が推進されれば、いざれ外国調査隊に対しても発掘だけでなく、保存修復まで責任を持つよう強く要請されるであろうことは想像に難くない。そのような変化にこれまでのような調査隊の編成で対応できるのか、費用の面で発掘から保存修復への継続を保証できるのか、海外調査に携わる者の一人としては気が掛かるところでもある。

註

- 1) シリア軍の撤退は2005年4月25日に完了した。
- 2) 派遣期間は泉拓良氏が2005年3月27日～4月6日、筆者が2005年3月27日～4月13日。
- 3) 松本健・泉拓良・辻村純代「レバノン・ティールの遺跡分布調査1999～2001」『西アジア考古学』第3号、117-134頁、東京2002
- 4) 神殿の創設時期についてはユリウス・クラウデウス朝の可能性が高い。P. Elia, L. Nordiguan, and H. Salame-Sarkis, *Le grand temple de Deir El-Qalaa. Etude architecturale, Annales d'Histoire et d'Archeologie*, Année 1983, Vol.2, Beirut, pp.1-45.
- 5) 例えば、N. Jidejian, Beirut, Beirut, 1997, pp.101, G. Taylor *The Roman Temples of Lebanon, Beirut*, 1986, Pl.90.
- 6) L. Nordiguan *Remarques sur l'agglomération Antique de Deir El-Qalaa, Mélanges de l'Université Saint-Joseph, Tome LIII, 1993-1994*, Beirut, 1997, pp.370.
- 7) M. Chéhab, *Église de Beit-M'ry, Bulletin de Musée de Beyrouth Tome XIV*, Paris, 1958, pp.165-171.
- 8) Round rotary olive crushers と Lever and screw press の組み合わせと考えられる。
- 9) 円筒部は直径50cm×高さ50cm、地下の貯水槽は2.7×2.3×3.5m。ニンフェウムと北部の貯水槽、浴場などを繋いでいるらしい溝は断片的にはあるが、現状でも認識できる。発掘調査によって是非、都市内の給水・排水システムを解明したいところである。
- 10) 神殿は紀元後2世紀、規模は11.06×9.24m。この発掘で発見された主な施設にはバシリカと搾油施設 (*Trapetum and Beam weights*) がある。T. Waliszewski and R. O. Tarazi, *Chhîm*, Beirut, 2002.

辻村 純代

国士舘大学イラク古代文化研究所

Sumiyo TSUJIMURA

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University